学園長だより 第15回

「お陰様」には「お天道様」

愛知淑徳学園理事長・学園長
小林素文

昨年は「お陰様」という言葉を何度となく使いました。挨拶や原稿の冒頭は決まって「お陰様で愛知淑徳は110周年を迎えました」だったからです。

近年、「おかげ」という言葉は、良い結果をもたらしたときだけでなく、「あなたのおかげでひどい目にあったわ」など、皮肉を込め悪い結果にも使われるようになってきました。しかし、「お陰」となると、良い結果をもたらしてくれた森羅万象に対しての、ありがとうであり、そこには見えないものへの感謝もあります。

学園祭で最高のものを創ろうと夏休みから準備する生徒達のひたむきさ。110周年記念コンサートのアンコール曲の校歌に涙している卒業生の思い。何とか学生・生徒の心に響く授業がしたいと、日夜努力している先生の向上心。

「ひたむきさ、思い、心」こうした目には見えないものが学校の雰囲気を醸し出し、そのお陰で愛知淑徳の今があります。「お陰様」は、感謝にふさわしい素晴らしい言葉といえましょう。

＊

「頑張る」とともに「淑徳魂」の柱となる言葉に「陰徳」があります。それは、誰かのためとか、学校のためとか意識することなく、さりげなく、時には自分のためにしていることが、何かのためになっている、ということではないでしょうか。

創立者小林清作先生が、さりげなく校内のゴミを拾われていたのが、生徒への無言の教えとなっていましたが、清作先生がゴミを拾われたのは、自分が創立した学園への溢れる情熱と愛の心からの、自然でさりげない行為なのでしょう。

学園祭に向かっての生徒のひたむきな頑張りは、学校の評価を高めてくれますが、生徒達にとっては、最高のものを皆で創り上げ、自分たちが悔いのない高校時代をおくりたいからなのでしょう。

先生が授業に日夜努力し工夫を加えていることは、学校の評判に繋がりますが、先生達は自分が教師として一人前になりたいからなのでしょう。

さりげなく自分のためにしていることが、知らずして良い影響を他にあたえている。こうした陰徳はいかなる時代となろうとも、学園の礎となっていきましょう。

＊

「お陰様」や「陰徳」で使われる「陰」は、陰気、陰口などマイナスイメージの言葉ともなりますが、「片陰（かたかげ）」「緑陰」など、涼しげで爽やかな言葉としても使われます。

「片陰」とは、「夏の午後、家並みなどの片側にできる太陽の陰」のことで、俳句の季語になっています。

片陰に己の影を引き入れぬ
（野田ゆたか）

「緑陰」は「青葉の茂った木立の陰」のことで、やはり夏の季語です。

幹高く大緑陰を支えたり
（松本たかし）

この2つの陰の句から、夏の陽の光が感じられます。

今は余り使われなくなりましたが、太陽を敬い親しんでいう言葉に「お天道様」があります。「食べ物を捨てたら、お天道様に申し訳ないよ」などと使われていました。

「陰」には「陽」があり、「お陰様」には「お天道様」がいる。日本語は奥ゆかしいですね。

星が丘キャンパス